

夏目漱石

愚見數則

愚見數則

理事来たつて何か論説を書けという。余このごろ脳中
底、諸子に示すべきことなし。しかし、ぜひに書けとな
らばしかたなし、何か書くべし。ただし、おせじはきら
いなり。ときどきは氣に入らぬことあるべし。また、思
い出すことをそのまま書き連ぬるゆえ、箇条書きのごと
くにて少しもおもしろかるまじ。ただし、文章はあめ細
工のごときものなり。延ばせばいくらでも延びる。その
かわりに、正味は減るものと知るべし。

昔の書生は、笈きゆうを負いて四方に遊歴し、この人ならばと思う先生のもとにおちつく。ゆえに、先生を敬うこと、父兄にすぎたり。先生もまた、でしに対すること、真の子のごとし。これでなくては、真の教育ということはできぬなり。今の書生は学校を旅屋のごとく思う。金を出してしばらく逗留するにすぎず、いやになればすぐに宿を移す、かかる生徒に対する校長は、宿屋の主人のごとく、教師は番頭でつちなり、主人たる校長すら、時にはお客のきげんをとらねばならず、いわんや番頭でつ

ちをや。薰陶どころか解雇されざるをもって幸福と思うくらいなり。生徒の増長し、教員の下落するはあたりまえのことなり。

勉強せねばろくな者にはなれぬと覚悟すべし。余みずから勉強せず、しかも諸子に面するごとに、勉強せよ勉強せよという。諸子が余のごとき愚物となるを恐るればなり、いんかん殷鑑遠からずべんせん勉旃勉旃。

余は教育者に適せず、教育家の資格を有せざればなり。その不適當なる男が、糊口の口を求めて、いちばん得やすきものは、教師の位地なり。これ現今の日本に真の教

育家なきを示すと同時に、現今の書生は、似非教育家でもお茶を濁して教授しうるという、悲しむべき事実を示すものなり。世の熱心らしき教育家中にも、余と同感のものたくさんあるべし。真正なる教育家を作り出して、これらにせものを追い出すは、国家の責任なり。りっぱなる生徒となって、かくのごとき先生にはどうてい教師はできぬものと悟らしむるは、諸子の責任なり。余の教育場裏より放逐さるるときは、日本の教育が隆盛になりしときと思え。

月給の高下にて、教師の価値を定むるなかれ。月給は

運不運にて、下落することも騰貴することもあるものなり。抱関撃柝ほうかんげきたくのやから、ときにあるいは公卿にまさるの器を有す。これらのことは、読本を読んでもわかる。ただわかったばかりで、実地に応用せねば、すべての学問は徒勞なり。昼寝をしておるほうがよし。

教師は必ず生徒より偉きものにあらず、たまたま誤りを教うることなきを保せず。ゆえに、生徒はどこまでも教師のいうことに従うべしとは言わず、服せざることは抗弁すべし。ただし、おのれの非を知らば翻然として恐れ入るべし。この間一点の弁疎を入れず、おのれの非を

謝するの勇氣はこれを遂げんとするの勇氣に百倍す。

狐疑こぎするなかれ、踟躇ちぢするなかれ、驀地ぼくちに進め。ひとたび、ひきようみれんの癖をつくれれば容易に去りがたし。墨を磨まして一方に偏するときは、なかなか平にならぬものなり。物は最初が肝要と心得よ。

善人ばかりと思うなかれ、腹の立つこと多し。悪人のみと定むるなかれ、心安きことなし。人を崇拜するなかれ、人をけいべつするなかれ。生れぬさきを思え、死んだあとを考えよ。

人を見ばその肺肝を見よ、それができずば手をください

ことなかれ。スイカの善悪はたたいて知る。人の高下は胸裏の利刀をふるって真二に割って知れ、たたいたくらいで知れると思うと、とんだケガをする。

多ぜいをたのんでひとりをバカにするなかれ。おのれの無気力なるを天下にふいちようするに異ならず。かくのごとき者は人間のかすなり、豆腐のかすは馬が食う、人間のかすは蝦夷えぞ松前の果へ行きてても売れることではなし。

自信重きときは、他人これを破り、自信薄きときはみずからこれを破る、むしろ人に破らるるも、みずから破

ることなかれ。

いやみを去れ、知らぬことを知ったふりをしたり、人の上げ足を取ったり、嘲弄したり、冷評したりするものはいやみが取れぬゆえなり。人間自身のみならず、詩歌俳諧ともいやみのあるものに美しきものはなし。

教師にしかられたとて、おのれの値うちが下がれりと思うことなかれ。また、ほめられたとて、値うちが上がったと、得意になるなかれ。ツルは飛んでも寝てもツルなり。ブタはほえてもうなってもブタなり。人の毀誉きよにて変化するものは相場なり、値うちにあらず。相場の高

下を目的として世に処する、これを才子という。値うちを標準として事を行う、これを君子という。ゆえに、才子には榮達多く、君子は沈淪ちんりんを意とせず。

平時は処女のごとくあれ、変時には脱兎ばんじやくのごとくせよ。すわるときは大磐石のごとくなるべし。ただし、処女もときには浮き名を流し、脱兎まれには獵師のおみやげとなり、大磐石も地震のおりはころがることありと知れ。小知を用るなかれ、権謀をたくましゅうするなかれ、二点の間の最捷徑しょうけいは直線と知れ。

権謀を用いざるべからざる場合には、おのれよりバカ

なる者に施せ、利慾に迷う者に施せ、毀誉に動かさるる者に施せ、情にもろき者に施せ。ご祈祷でも呪詛でも、山の動いたためしはなし、一人まえの人間がキツネにごまかさるることも、理学書に見えず。

人を見よ、金どけいを見るなかれ、洋服を見るなかれ、どろぼうはわれわれより、りっぱにいでたつものなり。

いばるなかれ、へつらうなかれ、腕におぼえのなき者は、用心のために六尺棒を携えたがり、借金のあるものは酒を勧めて債主をごまかすことを務む、皆おのれに弱みがあればなり。徳あるものはいばらずとも人これを敬

い、へつらわずとも人これを愛す。太鼓の鳴るは空虚なるがためなり、女のおせじのよきは腕力なきがゆえなり。みだりに人を評するなかれ、かような人と心中に思うておれば、それで済むなり。悪評にて見よ、口より出したことを、再び口へ入れんとしたところが、そのかいなし。まして、また聞きうわさなどいう、薄弱なる土台の上に設けられたる批評をや。学問上のことについては、むやみに議論せず。人の攻撃に会い、破綻をあらわすを恐るればなり。人の身の上については、尾に尾をつけてふれあるく、これ他人を雇いて、間接に人をうちたたく

に異ならず。頼まれたることなら是非なし。

頼まれもせぬに、かかることをなすは、すいきよう中のすいきようなるものなり。

バカは百人寄つてもバカなり。味方がおおぜいなるゆえ、おのれのほうが智慧ありと思うは、了見違いなり。牛は牛連れ、馬は馬連れと申す。味方の多きは、ときとしてそのバカなるを証明しつつあることあり。これほど片腹痛きことなし。

事をなさんとならば、時と、場合と、相手と、この三者を見抜かざるべからず。その一を欠けばむろんのこと、

その百分一を欠くも、成功はおぼつかなし。ただし、事は必ず成功を目的として、揚ぐべきものと思ふべからず。成功を目的として、事を揚ぐるは、月給を取るために、学問すると同じことなり。

人われを乗せんとせば、さしつかえなきかぎりは、乗せられておるべし。いざというときに、いたく投げ出すべし。あえてふくしゅうというにあらず、世のため人のためなり。小人は利にさとる、おのれに損のいくことと知れば、少しは悪事を働かぬようになるなり。

言う者は知らず、知るものは言わず。よけいな不確か

のことを喋ちようちよう々するほど、見苦しきことなし、いわんや毒舌をや。なにごとくも控えめにせよ、おくゆかしくせよ。むやみに遠慮せよとはならず、一言もときとしては千金の価値あり、万巻の書もくだらぬことばかりならば、くそ紙に等し。

損得と善悪とを混ざるなかれ、軽薄と淡泊を混ざるなかれ、真率と浮跳ふちようとを混ざるなかれ、温厚と怯懦きようだとを混ざるなかれ、磊落らいらくと粗暴とを混ざるなかれ。機に臨み變に応じて、種々の性質をあらわせ。一あつて二なき者は、上資にあらず。

世に悪人ある以上は、けんかは免るべからず。社会が完全にならぬ間は、不平騒動はなかるべからず。学校も生徒が騒動をすればこそ、漸々改良するなれ。無事平穩はおめでたきに相違なきも、ときとしては、憂うべきの現象なり。かく言えばとて、けっして諸子を教唆きよほうさするにあらず、むやみに乱暴されてははななだ困る。

命に安んずるものは君子なり、命をくつがえすものは豪傑なり、命を恨むものは婦女なり、命を免れんとするものは小人なり。

理想を高くせよ。あえて野心を大ならしめよとは言わ

ず、理想なきものの言語動作を見よ、醜陋しゆうろうの極なり。理想低きものの挙止容儀を見よ、美なるところなし。理想は見識よりいず、見識は学問より生ず、学問をして人間が上等にならぬくらいなら、はじめから無学でいるほうがよし。

欺かれて悪事をなすなかれ、その愚を示す。食わされて不善を行うなかれ、その陋ろうを証す。

黙々たるがゆえに、訥弁とつべんと思うなかれ。拱手きようしゆするがゆえに、両腕なしと思うなかれ。笑うがゆえに、かんしやくなしと思うなかれ。名聞にとんじやくせざるがゆえ

に、つんぼと思ふなかれ。食を選ばざるがゆえに、口なしと思ふなかれ。怒るがゆえに、忍耐なしと思ふなかれ。

人を屈せんと欲せば、まずみずから屈せよ。人を殺さんと欲せば、まずみずから死すべし。人をあなどるは、みずからあなどるゆえんなり。人を敗らんとするは、みずから敗るゆえんなり。攻むるときは韋駄いだ天てんのごとくなるべく、守るときは、不動のごとくせよ。

右の条々、ただ思いいずるままに書きつく。長く書けば際限なきゆえ略す。必ずしも諸君に一読せよとは言わず、いわんや拳拳けんけん服膺ふくようするをや。諸君今少壯、人生中も

つとも愉快の時期に会う、余のごとき者の説に、耳を傾くるのいとまなし。しかし、数年ののち、校舎の生活をやめて、突然俗界にいでたるとき、首をめぐらして考一考せば、あるいはもつともと思うこともあるべし。ただし、それも保証はせず。

(明治二八年一月二五日)

愛媛県尋常中学校 『保恵会雑誌』

日本文学電子図書館

愚見数則

著 者：夏目漱石

制作者：宮澤一郎

底 本：「夏目漱石全集」第3卷
春陽堂書店

1965年8月31日 初版発行

日本文学電子図書館